

特104

159

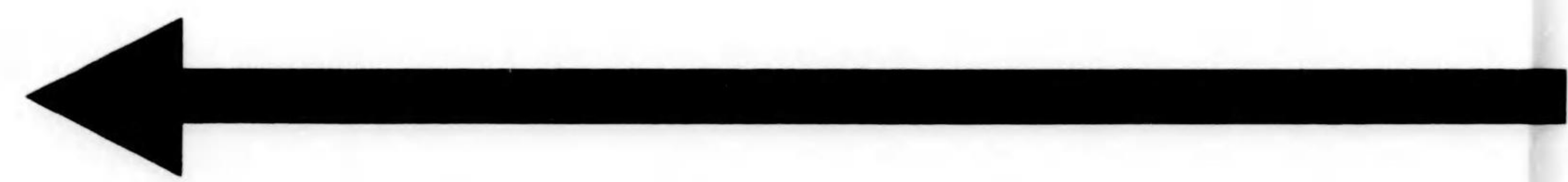
THE VITANOMY
 OR THE NEO-BIONOMY.
 A PROPOSITION FOR RESEARCHES OF STATICS
 AND DYNAMICS OF LIVING
 BY M. WATANABE

處
世
學

渡部萬藏著



始



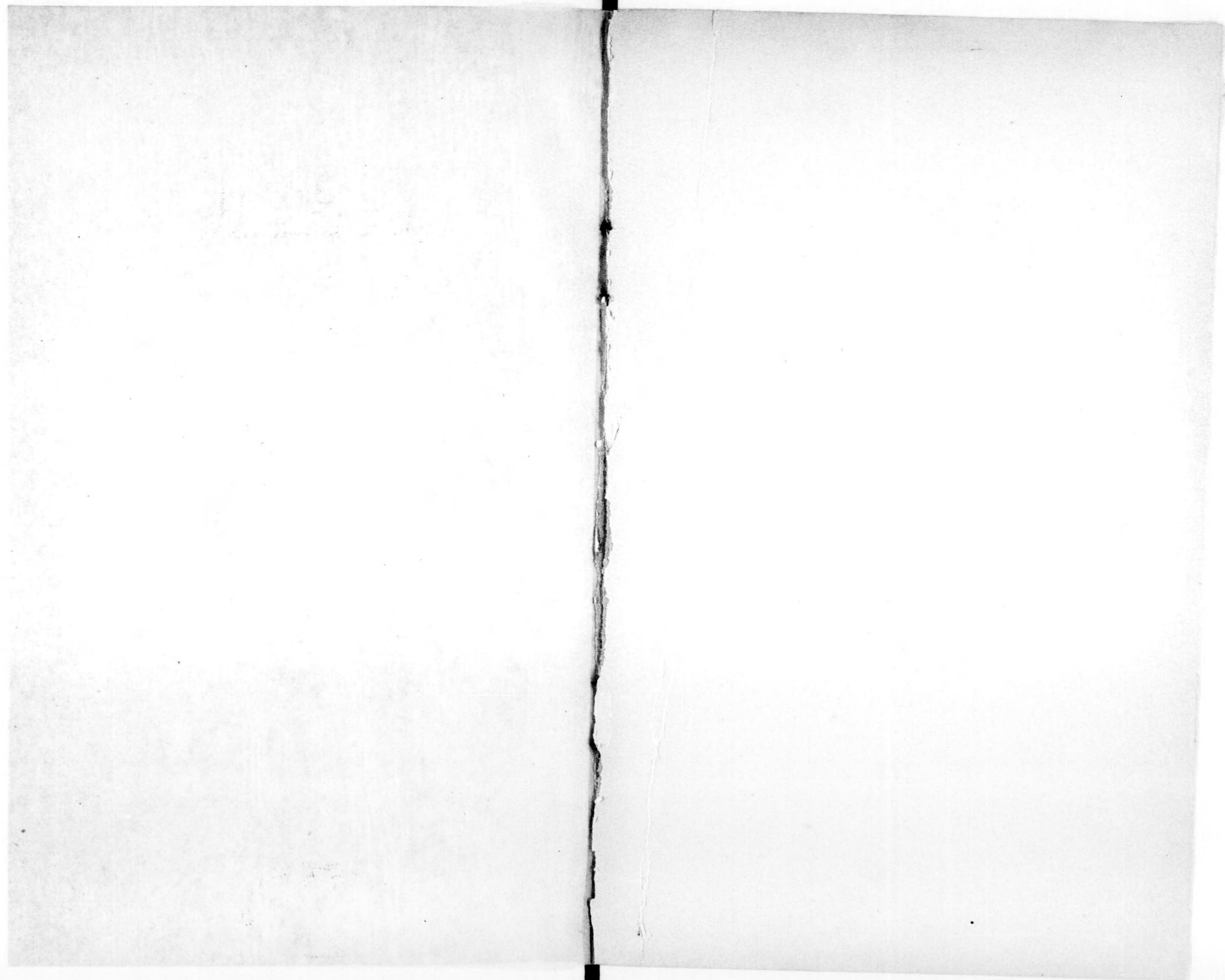
特104
159

**THE VITANOMY
OR THE NEO-BIONOMY.**
A PROPOSITION FOR RESEARCHES OF STATICS
AND DYNAMICS OF LIVING
BY M WATANABE

處
世
學

渡
部
萬
藏
著





行104
159



君子惠而不費勞而不
怨欲而不貪泰而不驕
威而不猛

居渡部太郎生

十二集卷之三



正
11. 3. 28
内交



大正十一年二月攝影

小引

一、余は結婚後九年にして初めて長男太郎を擧げ家庭爲めに賑ふに至れり而して本年は學齡に達し太郎の處世上最も有意義の一時代を展開せしが故に茲に紀念として處世學を出版し之を親戚及先輩知友諸賢の間に頒つことせり又太郎の誕生當時に揮毫ありし侯爵松方海東先生の書を卷頭に掲けたる所以は謝意を表するが爲めと且其辭句が「論語」に出てたる處世教訓なるが爲めなり。

一、余が處世學の着想は久しき以前拙著「世界大勢論」の卷尾及「教育界」誌上（明治卅八年十月發行）に公表したることあり其一新科學として成立すべき可能性を有するに就きては倍舊の確信ありと雖余は淺學非才且新科學の成立に専心なる能はざる境遇なり即ち本書に於ても亦單に着想のみを述ぶるに過ぎざるは自ら忸怩たる所以なりとす。

一、余の過去を顧みるに世に處して甚だ能率低かりしが故に太郎及其妹弟をして父の覆轍を踏まざらしめんとする衷情と余が自己に缺くる所を補はんとする慾求とは益々處世學の必要を痛感するに至れりされど科學界の新開拓は全人類に貢献する大業にして實に難事中の難事なり若し辱知諸賢中より之を研究する者起らば當に余一人の感謝に止らざるべし尙本文中に提案せし Bionomy は既に生物學として用ひられつ、あるが故に混同を避けんが爲め處世學は Vitanomy とするも亦可あり即ち希臘語の生活及生命 Vita と法則 Nomos とを結合せしものなり。

大正拾壹年 月 日

東京通商株式會社樓上にて

渡 部 萬 藏

處世學

第壹 處世學の定義

第一節 處世學の語義 處世學 Bionomy は人が共同生活體の一分子として物及人と連帶 Solidarity の關係に在る生活を研究對象とし、處世法則 Bionomics を闡明する科學なり。之に Bionomy なる語を充當したる所以は、此語源は希臘語のビオス Bios 即ち生命及生活の義と、ノモス Nomos 即ち法則の義との結合せるものにして、英語中最も處世學なる意義に適當なる語なるが故なり。社會學の鼻祖コムトは生活上の機能即ち生物學の法則に關する一般科學を包括して Bionomy なる術語を用したる以降(米國の社會學者ワードは其社會學に説きて、Bionomy—The science of the laws of life, or of living functions: dynamic biology. He (Comte) also employs the general science of the laws of living functions, or dynamic biology. としたり)今日に至る迄此語は學

者間に生命及生活を研究する科學の總稱寧ろ生物學と同義に慣用されつゝあり。されど未だ普通に用ゆる術語にあらざるが故に、余は其語源に徴して茲に其意義を限定し、余の所謂處世學に充當せし所以なり。

第二節 處世學の内容 人は宇宙の表現相の一部として他の表現相と連帶關係に在り、而て又人類社會の一員として他人と連帶關係に在り、此連帶關係に在る生活を處世と稱す。即ち處世學研究の對象是なり。然るに文化の發達に伴ふて往時の困難としたる自然的環境に處すること漸次容易となりしに反し、物環境及生活資料(及人地位、行動)と自我(體力及能力)との統合は益々複雑となり、人々處世難を自覺することも亦益々痛切となれり。而て處世法則を研究するにも諸科學との交渉は益々多端となり倫理教訓にて能事盡せりとなす能はずと雖、處世學は是等諸科學の範圍に入りて研究をなすにあらず、唯現在の文化程度を標準とし、諸科學の定説とする所を採りて研究の豫備智識となすのみ。

第三節 生活の意義 生活 Bio. とは自我發展 Self-development の義なり、自我發展とは生きんとする自我より良く生きんとする自我の表現是なり。生活に物質生活 Livelihood と精神生活 Mentalization との二あり、物質生活に又生活(狹義の生活又は生

計) Living と生存 Existence との二あり、勿論物質生活と精神生活とは便宜上區別したる名稱に過ぎずして、必しも截然たる分界線あるにあらずと雖、要するに物質生活とは環境及衣食住其他の生計資料、肉體關係の要件等即ち對物關係にして、其中の狹義の生活、所謂經濟生活即ち通説の生計は教育、修養、趣味、娛樂の餘裕ありて比較的自我發展多き生活、假令ば現在の資産階級又は有識階級にして貧窮の缺點を補ふ智徳ある者の生活を稱す。生存とは何等向上の餘裕なく、比較的自我發展なき生活、假令ば無資産階級又は資産あるも特種の事情ありて無能的に一生涯を畢るものゝ生活を稱す。

第貳 處世の法則

第一節 限界點 限界點 Marginal line とは現實に統合を得べき活動の極限の程度を指稱す。人は時間的にも空間的にも無限無窮の自我發展を欲し、現實の處世より進んで理想となり信仰となり或は悲觀して厭世となり自棄となると雖、現實問題としては自發的 Spontaneous に或は強誘的 Compulsory に有意的 Voluntary に或は無意識的 Non-voluntary に自他の統合を得る爲めに活動しつゝあり、假令又統合を欲

せざるも統合を無視するも自他の連帶上結局統合を得ざれば止まず。此統合を得べき活動の限度を限界點と稱す。

第二節 統合 Harmonization は支那の中和或は中庸よりも廣義なり、中和とは何ぞ、中庸に「喜怒哀樂之未發、謂之中、發而皆中節、謂之和、中也者、天下之大本也、和也者、天下達道也、致中和、天地位焉、萬物育焉」とあるものはなり。統合とは各部の制統整合の義にして、調節、中庸、中和、諧和、合奏、折衷、協調、統一、渾一、適歸、勢力均衡等の意義を包括す。世に處するに先づ對我關係に於て自己の心身を統合せざるべからず、心身共に健康ならば幸福の第一要件は滿されたるなり、各人の素質により又は時處により精神旺盛にして身體強健ならざる者あり、身體強健にして精神旺盛ならざる者ありと雖、心身統合の實例は「健全の精神は健全の身體と共に在り」Meno sana in corpore sano の真理なるを示しつつあり。次に對我及對人關係に於て重要なものは、人類の連帶生活上自己の性質或は立場に適當なる地位職業に就くべく又就かざるを得ざるべく、之を以て自己と社會との統合を得べきことはなり。されば統合は必しも任意に自發的に來るのみならず、自我自我又は他より自我に加はるべきもの Auxiliary を包括す、弱ければ讓歩或は妥協するか、又は強誘的に他に屈從せ

しめられて統合を得べし。更に環境(氣候、風土)の如き自然的環境及國家、團體の如き人為的環境との統合に於ても亦自我發展の多少強弱によりて同一環境に對して異なりたる統合を結果すべし、假令ば往時は風雨は不可抗力の天災としたるも、現時は風雨計によりて豫知し豫防の方法を講ずるが如き、氣候、風土の關係にて不適處の植物も現時は不自然の人工栽培が成功するが如き、又各個人に就きて之を見るも健康者の堪ゆる寒暑に病弱者の堪えざるが如き、航海中には水夫の平然たる風濤に通常人の苦痛を感じるが如き是なり。要するに統合を得る限界點は自我發展の程度によりて異なり、其多く強きときは自我多くして且時間的にも空間的にも限界點の距離短し。其少く弱きときは自我少く且限界點の距離長し、何れにしても落付く處に落付くものなり。是前節説明の限界點にして此限界點に達したる状態を統合と稱す。

第三節 處世上の作用 Bio-action に二種あり、限界作用 Marginal action と無限界作用 Non-marginal action とす。國家がその存在の爲には内外各部の勢力の均衡を保たざるべからざるが如く、個人の生存の最大要件は自我統合更に之を範圍を狭くすれば心身統合を保つに在り(自他の統合は寧ろ第二義なりと謂ふべし)。

慾望熾烈なれば慾望の充足(假令ば住宅を欲して之を建築し、流行服を欲して之を購入し、定期市場に於て相場の大當を得、餓渴は飲食により、小兒は欲する玩具を得、受験者は登第し)によりて、身體の羸弱者は健康によりて、疲勞は休憩によりて、悲憂は慰安によりて、興奮は冷靜によりて、心身の統合を得て安定すべし。此統合を得たる限界點は其人によりて質量を異にし距離を異にし期間を異にし行程を異にすと雖、此限界點に向ひつゝある活動を限界作用と稱す。然るに自我發展は無限にして人は長く其統合に満足するものにあらず、所謂隴を得て蜀を望み統合を更新 Renew せんとす、假令又之に満足せんと欲するも連帶關係あり、外部の變動により統合を破られ、或は自ら破るの止むなきことあり、一時の安定より更に又新なる統合を得る爲めに活動を開始するに至る、此統合を破る活動を無限作用と稱す。

第四節 連環率 連環率 Reurring Law とは處世上活動が限界點に達して統合を得るも、必ず安定を破りて更に活動を起し、限界作用と無限作用とは交互無限に連環(循環)とは同一行程又は表現相を繰返へす義にあらず)する法則なり。自我發展には限度なく他より優勝の地位に立たんとする名譽慾、自我又は環境を改造せんとする創造慾、自己表現を試みんとする藝術慾、目的の有無に係らず無爲を厭ふ

活動慾、或は修養向上、自己改造等の爲に自發的に統合を破ることあり。又天變地異の爲に來る自然的環境の變化、文化の向上、社會の推移、社交關係、競争者出現等の人為的環境の變化の爲に強誘的に統合を破らるゝことあり。其自發的或は強誘的何れたるを問はず歸着する所は自我發展に在りて、自他の統合を得れば安定し、安定すれば更に之を破りて活動し限界點に達して統合す。斯くの如く限界作用と無限作用と交互連環するが故に、人に生々發展あり、無限の改造あり、無窮の向上あり、宿命論 Fatalism に即せず、利那主義に墮せず、改進止まざる所以なり。

第五節 連環剩餘 連環剩餘 Reurring remainder とは無限作用によりて統合を更新して無限に連環循環するも、其統合を破りて全く新なる行程を進むにあらず、假令自他共に失敗と見るべき場合にも又自己のみが満足せざる時も、強誘的にも、無意識的にも、自我發展は消滅するものにあらず、必ずや深淺多少の効果を殘存するものなり。即ち經驗、修養或は感化による人格の發顯か、社會的勢力、名譽或は財産として體現 Embodiment するか、又は其他何等かの剩餘の存するあり、此剩餘を集積するを自我集積 Self-accumulation と稱す。歴史は繰返すと謂ふは同一行程を繰返へす意味にあらず、國家も個人も統合を更新する爲に、限界作用と無限作用と交

互無限に循環する状態を形容したるなり。而て人は同一行程を繰返へすことなく、自我集積ありて無限に流動發展するが故に、社會の進歩あり文化の向上あるなり。

第六節 自我集積 Self-accumulation は、其人の社會的地位或は歴史的地位として發顯するものにして、心的には人格、經驗、知識、悟道、慣習となり、物的には財産、事業等となり、對人的には名譽、感化、共鳴、慣習となる。而して自我集積少き時代、即ち文化の發達せざる古人は、對人關係に於て單純なるが故に、人爲的環境に處すること容易にして、自然的環境に處すること比較的困難なり。之に反し自我集積多き時代、即ち文化の進歩したる現代人は、物質的設備により自然的環境に處すること容易なるも人爲的環境に處すること比較的困難なり。即ち文化とは自我の延長たる國家、社會の自我集積にして、之が爲めに國家も個人も自我發展あり又之が爲めに自我發展の制限を受く。自我集積は相當の時處を要したる連環剩餘なるが故に、一朝にして排按制限すべからざる一例は、人は慣習の壓迫を破ること難く、經驗の桎梏を脱すること易からざるに徴して之を知るべし。

第七節 處世と成功

米國のマーデンの如き、成功鼓吹の専門家あり、又世人の多

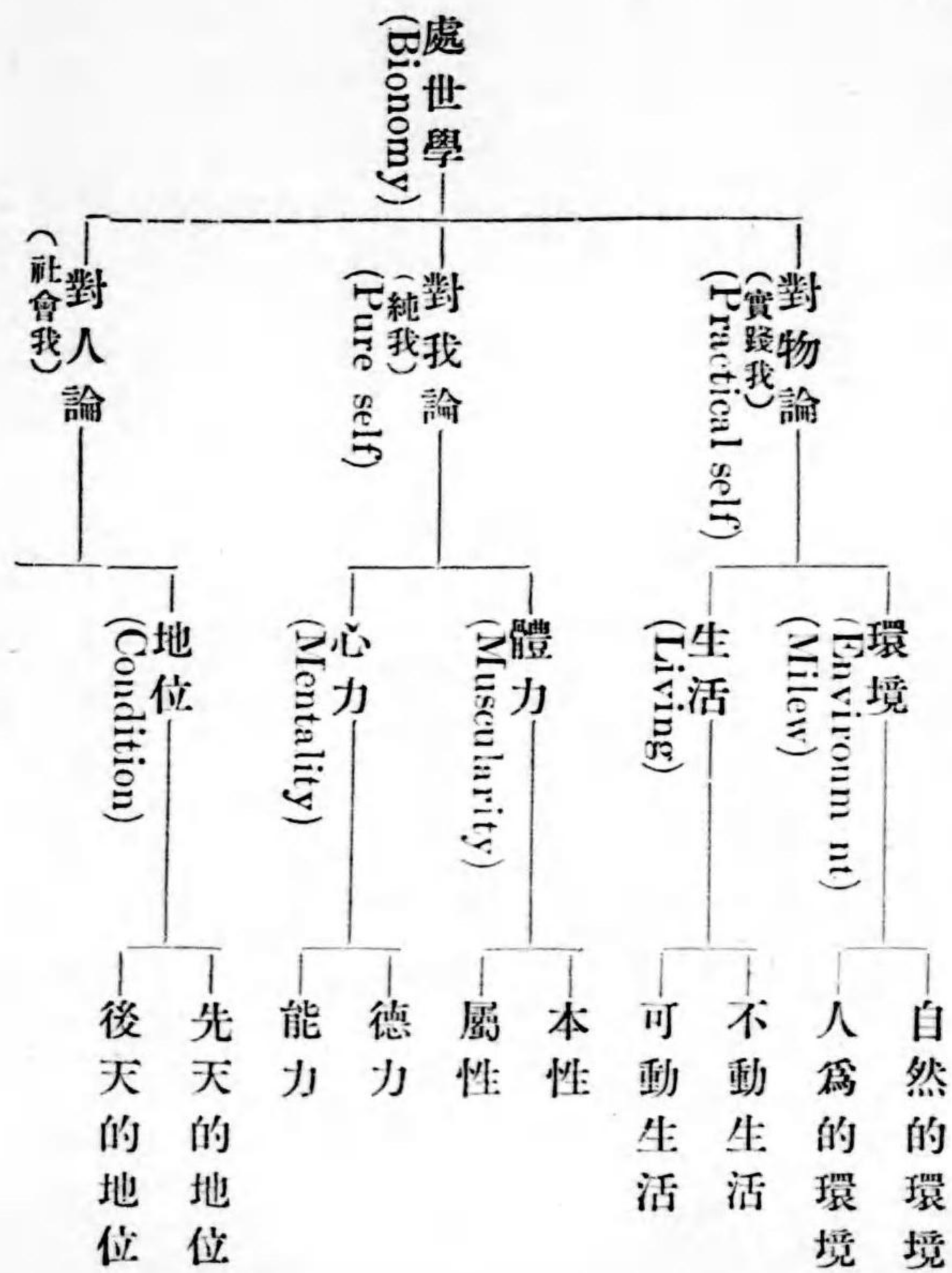
くは處世の標準を成功 Success に置くを常とす、若しこの成功にして余の所謂自我發展の多き統合を謂ふにあらば何等間然する處なきも、通説の所謂成功は對他成功の一部にして富貴を得るにあり、假令不義にして之を得るにあらざるも亦是浮雲の如きものにあらずして何ぞや。勿論人は對物、對人、對我の連帶生活を營むものにして絶對的の自由なしと雖、比較的多くの自我發展によりて比較的多くの自己満足 Self-contentment を得るは成功なり。而て自我發展の程度を見るに社會的地位高く自我集積多きときは、社會的地位低き者或は人格低き者と同一割合(假令ば等しくは自我五、物及人五)なるも質と量に於て増加す、要するに成功とは對我關係と對他關係との統合を得たるものなり。然るに人は自我發展の爲めに長く統合を保つ能はざるが故に成敗幸福は事物、時期、場所の局限ありて普遍性を有するにあらず、從て成功幸福に驕るべからず、失敗禍害に失望すべからず、如何なる場合にも自我集積あり向上の一路あるものなり。若し其人の無力又は自暴自棄なるときは自我集積減少し、之に比例して自他の統合に於て自我發展は減少すべし。

第參 處世學の研究法

第一節 處世學の體系

體系 System は研究の必要上設定するものにして、必ずしも

之に膠着するを要せざること、猶法律を公私法に分ち經濟學を需給の二分又は生産、消費、交換、分配の四分組織にて説明するも、全然之に準據せざるべからざる理由なきが如し、處世學の體系の私見は左の如し。



然るに環境中の人爲的環境は對人論に關係多く、對人論の大部分は個人的關係にして、人爲的環境とは團體又は群衆心理中公共營造物又は何等かの機關を通過して現はるゝ總稱なり。而て生活は對我論に關係あるも、狹義の物質的生活を論ずるが故に、對物論中に包容したる所以なり。されば環境及生活の一部を對我論に加へ、對物、對人を一括して對他論とし、處世學を對我、對他の二部に分つても亦研究上の一方法たるべし。

第二節 處世學と特殊處世學

處世學に官吏處世學、學者處世學、實業家處世學或は

婦人處世學等の區別なきは勿論なるも、科學上の普通の法則を具體的に説明するに當り、特に多く研究の對象とする方面により區別して命名するを便宜とす、恰も化學に有機化學と無機化學とあり、經濟學に商業經濟學、工業經濟學等あるが如く、特に官吏の生活を研究の對象とせば、之に官吏處世學と題するも敢て不可なかるべし。又處世學の内容の一部は價值判斷の研究なるが故に、官吏哲學と稱するも亦不可なしと雖、社會科學は何れも其一部は價值判斷の研究なるが故に、處世學の

研究が偶々價值判斷に及ぶも、此價值判斷は寧ろ研究の傍系にして處世學の使命
 茲に在りと謂ふべからず。オーギュスト、コムトは社會生活の現象は相互錯綜し、
 其關係甚密接にして之を各自専門的に個々別々の方面に分割して觀察するは、到
 底其真相を得る所以にあらずとの見解より社會科學全體を統一したる社會學を
 創唱したり。されど人類の社會生活の範圍頗る廣大複雑にして、如何なる天才と
 雖、一個の力を以て之が綜合檢討に成功すべくもあらず、獨り社會現象のみならず
 自然現象と雖、交々關連して分離すべからざるが故に全體を包括して研究するを
 可とするも、事實不可能なるが故に、幾多専門の科學に分つを便宜とすべし。而て
 各科學には共通の法則あると共に特殊の法則を備ふ、是科學分立の理由なりとす。
 されど處世學を分ちて官吏處世學、學者處世學、實業家處世學等となすの無意義た
 る所以は、一般處世學と體系法則に於て殆ど全然同一なるが故なり。唯研究の對
 象を特に官吏、學者或は實業家に採るときは分科にあらず、特種の目的に出づるも
 のにして之を特殊處世學と稱すべきなり。

第三節 處世學の研究法 自然科學は多數の事實を蒐集し之を歸納して法則を得
 るのみならず、更に發見又は起り來る事實に對し、此法則の適合するや否やを實驗

する機會多し。然るに社會科學に於ては事實を精確に比較研究する時處世學の
 みならず、其同一事實と見ゆるも實は根本概念に於て異なることあり、是に於てか
 社會科學の檢討には自然科學と異なりて史學的となり、數量的ならずして統計學
 上の蓋然性と類似するものとなる。又自然科學の法則は一義的因果を示すも唯
 物史觀の法則は、結果の複數となる。即ち處世學も亦他の社會科學と同一の研究
 上の困難ありて對比律多きも亦當然なり。而て處世學は他の諸科學の豫備智識
 を要するも、勿論他の諸科學の領域に入りて檢討するにあらざるは、諸科學が相互
 關聯するも互に他の科學の定説を豫備智識として各自の研究を進むるに同じ。
 故に獨り處世學のみならず、有ゆる自然科學及社會科學が其關聯する諸科學の進
 歩によりて形式及内容に變化あるは當然の歸結なり、此點に就きても亦處世學の
 研究は他の諸科學と共通の困難ありとすべし。又科學は其研究の對象の如何に
 係らず、表現律研究にして重に因果の法則を發見するを目的とするが故に、獨逸の
 經濟學者シュモラーの所謂觀察、記述、定義及分類の四種の方法を必要とし、歸納、演
 繹共に檢討の要諦たるは謂ふ迄もなし。而て處世學は豫備知識として傳記、歴史、
 地理、心理、生物、政治、法律、經濟、社會、統計、倫理、教育及哲學等の檢討を要するも、殊に多

く傳記、統計及日常目睹の社會生活に據り觀察と記述との材料を得べく、歸納、演繹によりて因果の法則のみならず、更に價值判斷より進んで究竟律の體得を爲すも可なり、されど科學としての處世學は表現律の研究に限定すべきものとす。佛蘭西の心理學者アントナン・アイミュウ氏は其名著「實驗心理的論文、自治の修養」(Le Gouvernement de soi-même, Essai De Psychologie Pratique. に「法則は存在す、汝は何等かの意義に於て之を適用し得べくして、之を破壊するを得ず。人は其法則を尊重するの條件に依りてのみ其生涯を自然の如く支配す」) La loi existe; vous pouvez l'appliquer dans un sens ou dans l'autre; mais vous ne pouvez pas la détruire; et l'on ne gouverne sa vie comme la nature, qu'à la condition d'en respecter les lois. と説きたり。余が處世學研究の理由も亦之に外ならざるなり。

處世學 畢

大正拾壹年三月廿五日 印刷
大正拾壹年三月廿八日 發行

處世學 附
(非賣品)



著作兼發行
兼印刷人

渡部萬藏

東京市四谷區麴町十二丁目十六番地
電話九段 三八一〇番

渡部萬藏の左の著書中絶版のものは上野の帝國圖書館其他にもある筈です御序もあらば御高覽を請ふ

世界大勢論

(絶版)

明治三十三年初版
東京堂發行

百廿頁

(批評一班)「慶應義塾學報」曰く著者は弱冠なれども廣く東西の例を擧げて白人種の衰微を論じ世界の平和を主張したるもの希くは歐語に翻譯し歐州中原の讀書界に提出せんかな「東京朝日新聞」曰く年少氣銳の著者が世界の平和を論じ日本の天職を説きたるもの聞くべきの議論最も多し

英和獨照法律語彙

明治四十年初版
博文館發行

百八十頁

法律大辭典

明治四十年初版
郁文舎發行
總六號三段組菊判千五百頁

(批評一班)「法律新聞」曰く法學界空前の大著述「法學協會雜誌」(鳩山秀夫氏)曰く能く多數の語を網羅して説明亦要を得たり「時事新報」穩當なる英佛獨對譯

英和對譯日本財政史論

明治四十年初版
有斐閣發行

紙數百廿頁

(批評一班)「京都法學會雜誌」(神戸正雄氏)曰く簡單なれども能く要領を得たり特に其英和兩文より成ると書中間々歐米の史實をも比較参照したるとは

學徒を益すること決して尠少ならず

和英引用辭典

明治四十三年初版
昭文堂發行

三百六十頁

人一代の法律

大正元年初版
公文書院發行

四六版千四百頁

(批評一班) 「大阪毎日」「朝日」其他の諸新聞、人の誕生より學齡、成年、結婚、就職、其他の法律行爲より隱居死亡に至る人間一代の法律關係を小説の如き趣味ある説明を加へたるもの通俗法律書の上乗なり

日本六法註釋

大正三年初版
求光閣
公文書院發行

五號六號組菊判千七百頁

(批評一班) 「諸新聞雜誌」穩建適切の註釋

東京通商株式會社沿革

(非賣品)

著者の經營するアテナ湯(婦人藥)其他の賣藥及化粧品を製造しつゝ、ある東京通商株式會社(明治廿二年創業)の沿革を述べたるものなり

處世學

(非賣品)

Handwritten stamp with characters 'H' and '1009' inside a decorative border.

終

